

こども教育会議 会議録(速記メモ)

日 時	場 所	出席	小松市長、松尾教育長、大庭教育長職務代理者、教育委員（牟田、松尾、落合）、野口こども教育部理事、男女参画・市民協働課（奥課長、立花係長、山崎主任）、学校教育課（福田課長、山口指導主事）、教育総務課（真崎課長）、こども未来課（緒方課長）、松尾企画部長、企画政策課（筒井係長、村山）
令和7年2月19日（水） 13:30～14:30	武雄市役所 4階 災害対策本部室		
1. 協議件名	第 38 回こども教育会議（教育分野からの男女共同参画社会実現に向けた取組について）		
議事録			
内容	1 開会（進行：松尾企画部長） 2 議事（議事進行：小松市長） (1)教育分野からの男女共同参画社会実現に向けた取組について ①話題提供 現状、今後の取組と課題について説明を行う。 ②意見交換 <出席者の意見> (松尾委員) ・身の回りでのアンコンシャスバイアス（無意識の思い込み）に関して思い浮かぶのは、保育園などでは、保育士と聞くと女性、子どもが病気のときはまずお母さんに連絡していた。制服は男の子がズボンで女の子がスカート着用、遊び着の色は男の子が水色、女の子がピンクであった。 ・私が幼児教育に関わるようになった 10 年前からすると、一般社会と同様に、こども園や保育園の現場においても最近かなり変化しているように思う。例えば、男性保育士の数が増え、社会での男女雇用均等の意識の高まりからか、家庭での家事育児の役割分担にも変化が出てきていることを保護者の様子から感じられる。子どもたちの遊び着は水色で統一、制服はズボン、スカートを選択できるなど変わってきた。徐々にではあるが、今までの私たちの無意識での思い込みが改善されつつあるように思う。 ・ジェンダー平等に関する意識を浸透させるためには、まずは私たちがジェンダーの枠にとらわれることなく、1 人 1 人の個性を尊重すること。女性だから男性だからという先入観をなくして、ジェンダーに関係なく、それぞれの個性を大事にすること。そして何か課題に気づいたときには、勇気を出して声を上げることがジェンダー平等への第一歩であると考える。 ・また、通常保育の現場において、子どもたちの主体性や学びの多様性が大切だとされる部分にも多く共通している部分があるのではないかと。私も幼児教育に関わっている者として、ジェンダー平等に少しでも貢献できるように、園の環境やそれ以外の場面において、色々な枠にとらわれることなく、自分ができることを実践していきたいと感じた。 (市長) ・こども園、保育園においても、この 10 年で変化してきた。確かに若い夫婦は昔に比べると家事の分担など色々な面で変化してきているように感じる。 (牟田委員) ・学校教育面から言えば、先ほど市長の発言にあったように、理系の女子が増えてきている。昔は看護師が女性、工学系や機械系が男性などの進路指導における思い込みがあった。教員や保護者の職業選択の意識は変わっ		

てきていると思う。今は若いうちから男女共同参画について教育を受けているからか、男性でも看護師や保育士になるという風潮に変わってきている。

- ・男女共同参画の考え方は、学校教育では先に進んでいると思う。私の学生時代は家庭科すらなかったが、今は小学校から家庭科の授業がある。また、今は性別関係なく全て同じカリキュラムで、体育の時間に男子が武道、女子がダンスというようなきまりはない。制服も選べるようになっている。
- ・これからは大人だけの会議で議論することなく、男女共同参画の最先端にいる子どもたちから学ぶべきではないかと考える。
- ・例えば、地区の炊き出しや会長、役員など地域の慣行において男性、女性の役割で子ども達が不自然だと思うことを聞くことで、大人の意識の変化につながるのではないか。
- ・幼少期は、男性が家事をする風潮がなかった。世代が変わればいずれ意識が変わってくるかもしれないが、今まさにジェンダーギャップで困っている方もおられるはず。そういう意味では子ども達の声聞いて、おかしいと思うことは子どもたちからメッセージを発してもらうことで変化をもたらすのではないか。
- ・啐啄同時(そったくどうじ)ということわざがあるが、皆一緒に考えていかないと男女参画社会は進まない。家事をするのに、夫婦の片方が疲れているときにはもう片方がするなど、自然に役割分担ができると一番いいと思う。50:50 を求めると、喧嘩になってしまう。
- ・親または祖父母世代を見て子どもは育つ。子どもたちの意見を聞いて、親も反省しないといけないし、おじいちゃんおばあちゃんもお孫さんに接するときは、意識を変えないといけない。そのモデルが、小学校、中学校、高校の学校教育にあるのではないかということを感じた。
- ・武雄市はこどもまんなかを基本理念に掲げている。子どもの意見を取り入れ、男女共同参画社会の実現を推進できたらと考える。誰が見ても男女平等に役員や仕事を選択できるよう変えていくには、子どもの意見を取り入れて前に進めるしかないと思う。

(市長)

- ・子どもからこそ学ぶべきであり、これからの男女参画については大人だけで考えるのではなく、子どもたちがいる場に出て、いろいろお話を聞くというのは、これは担当課にとっても非常に意味のある発言だったと思う。
- ・教育現場での男女共同参画の取組が進んでいるという発言があったが、なぜ教育現場では進んでいるのかを考えるとヒントがあるかもしれない。

(大庭教育長代理)

- ・教育現場で男女参画が進んでいる理由として考えられるのは、学校は、男女共同参画について国が示す取組みを率先して取り組みながら、子どもたちに男女共同参画について教えていたこと。
- ・私が小、中学校の時から教職についた頃までは、親や先生、地域にも男らしさ、女らしさに関する意識は残っていたように思う。性別によらない役割ということを考えるようになったのは私自身が管理職についた時だった。
- ・先生方が子どもたちの呼び方や整列の仕方など早期に取り組んだ成果である。

(牟田委員)

- ・学校の中で「君」「さん」と区別するのは古い話であり、全部「さん」で統一されている。運動会の団長なども性別関係なくやるのが当たり前になっており、特定の性別でなければいけないという意識はない。

(落合委員)

- ・男女平等じゃないと思ったのは、結婚してから家事などやるが増えたとき。妻が家事をしなければならない、妻は家庭を守っていくものと思いやってきたが、大変だった。

- ・例えばお正月は姑さんと私が動いている。姑さんも休みたい気持ちがあると思うので、夫や息子たちにも手伝ってもらおうようにしている。他にも私が疲れた時にはそれを察して夫が家事をしてくれる。
- ・休む時は一緒に休むというように、自分の意識を変えていくべきと感じたし、子どももそういうふうに育てていくべきだと思った。
- ・例えば、家族写真を見た時に息子が母親が写っていることが一番少ないと言った。息子が母親を大事にしてくれるのは嬉しいし、大事だと思ったので、家族を大切にできる考えを育てていきたいと思う。そしたら将来夫婦と一緒に家事をしたりと夫婦での生活も楽しくなると思う。

(市長)

- ・今の話で感じたのは家庭での親の姿は、すごく大事ということ。
- ・ジェンダーギャップについては、男性が意識を変えなければとつい思ってしまうけれども、落合さんのように自分から考えや行動を変えていくことで、周りも変わっていくものだと思う。
- ・落合さんは PTA の会長もされていたが、実際に会長職をやってみてどのように感じられたか。

(落合委員)

- ・男性の方から、なんで会長を引き受けたのか、自分から立候補したのかなど聞かれた。子どものために何かしたいと思った結果であり私の中では自然なことだった。私が会長をすることで、いろんなお母さんたちに興味を持ってもらい、もっと身近で楽しいものと伝えられたらと考えた。
- ・役員をするということは、何をすればいいのかわからない、大変であるなどのイメージがあったが、実際にやってみると子どもと思い出を作ることができたり、普段見ることができない様子を見ることができ、成長を感じるなど良いことがたくさんある。
- ・生徒会長は女の子が多数おり、学校の中では男女平等が進んでいると感じた。

(大庭教育長代理)

- ・学校で管理職として勤務する中で、役職による女性の先生方の力を感じた。
- ・今回のテーマの課題である思い込みをどう解消していくかというと、本当は幼稚園ぐらいからの教育が必要であると思う。
- ・他には、大人や地域、保護者、企業事業所などに出向いてアウトリーチ型の出張研修会のようなことをすること。田舎ほど昔ながらの風習が残っているので、大人に思い込みを変えてもらうための研修が必要である。
- ・昨日公民館の運営審議会があったが、役職をする人が限られていると感じた。高齢者だけではなく、武雄中学校で開催されたトークフォークダンスのように子どもを取り入れた取り組みをしていかなければ、地域がどんどん過疎化して、子どもたちが残らないような地域ができるのではないかと。
- ・男女共同参画を推進するにあたっては、子どもたちと共に地域や保護者、企業も巻き込んでいかないといけないと思った。
- ・この話題について妻と話した時には夫婦喧嘩のようになってしまったが、子どもたちは、男女平等の意識が浸透している。それは学校教育の成果だろうと思うので、大人の考えを変えていくための取り組みが必要と思う。
- ・私が理事を務めているスチューデント・サポート・フェイスは、九州地区の NPO として初めてえるぼしという賞をいただいた。それは代表や総括、武雄支所長などは男性が勤めているが、各ポジションのチームに女性がおおり、女性が働きやすい職場ということを認めていただいた。企業で女性の出番を作ることにはなかなか難しいと思うが、そういうところに市が出向くようなことがあってもいいと思っている。

(市長)

- ・今のお話は、牟田さんの話にあった子どもから学ぶべきであるという話とも通ずるところがあるけれども、そのやり方としてトークフォークダンスのような大人と子どもが一緒に対話をするような場に企業も巻き込むというのは、大事と思った。

(教育長)

- ・先ほどなぜ学校では男女平等が進んでいるかという話があったが、学校では子どもたちは平等が基本である。どんな子ども学校内では平等意識があるため、子どもたちは特に違和感なく受け入れてくれていると思う。
- ・学校でどんなことに取り組む余地があるかということはずっと考えていた。制服を変え、名簿を変え、いろんな環境を変えてきた。あとは根気よく子どもたちに指導していく。それでもまだ取り組みの余地があるかもしれない。
- ・男女の役割が画期的に変わってきたと思うのは、男性の職員が育休を取るようになってきたこと。育児はほとんど母親に頼っていた。育休を取る男性教員が増えてきたので、今後世の中はかなり変わってくるのではと思った。
- ・昔から小学校の6割ぐらい、中学校では4割から5割は女性の先生という中で、今までは国語と英語は女の先生、数学と理科は男の先生などの違いがあったが、今は教科による違いはない。昔は男女別れて中学校の技術家庭や体育の授業を行い、男子は家庭科、女子は技術教科を学ばずに卒業していったが今は一緒に勉強している。それだけで満足せずに、さらにどういったことができるか考えているところであった。学校教育課の意見はどうか。

(山口指導主事)

- ・授業の中では学級活動等。男女平等という意識は授業でやっている所以浸透してきているというふうに思う。男性が家庭科の先生を務めるなど、教員側も変わってきており学校現場では進んできていると思う。
- ・保護者や地域の方々と一緒にこの問題を考えないといけないと思うので、学校としては授業でというより、例えば親子ふれあい、PTA などの活動の中で講演会などしていただき、親子で一緒に考えて、話し合う場を設けたら、非常にいい勉強になると思う。

(教育長)

- ・武雄市は地域の方が学校に来ていただく機会があるけれども、そういった折に男女共同参画に焦点を当てたPRをしてこなかったというように思う。学校に来てもらう機会を利用して何かできないか？

(山口指導主事)

- ・親子ふれあいや教育講演会で男女共同参画をテーマに話をしてもいいと思う。

(市長)

- ・ジェンダーギャップ解消について、まだ頭を整理しているところだが自分が偽善者のような気がしている。毎日の家事をほとんど妻に担ってもらっており、必要に迫られないときはしない。そういう状況下で、いわゆるダメな大人になっている部分もありながら、このテーマを議論していることが、自分でも偽善者のように感じる。
- ・年齢が高くても必要に迫られればやっているし、お互い夫婦で話がしっかりできていて、こうしようというところはできるので、一概に年を取っているからダメ、若いからいいというわけでもない。
- ・若い人は、今のお話を聞いていると明らかに変わっているし、この世代が上がっていくと世の中も自然と変わってくるものと期待している。しかし、今そこを早めてやらなければということをやちょっと私自身なかなかこのテーマに関してはこれをやるべきというのが出てこないのは正直なところ。
- ・今日いろんなお話を聞いて、学校はこれまで遅れているみたいなイメージがあったけれども、実はそれこそが思い込みのようなところもあった。この分野について言うと、結構そこは進んでいるのであれば、我々は学校現場の取り組みや、これまでされてきたこと、そして子ども自身からもっと学んでいくというのをまず、やらなければなら

いことだという気がした。

- ・そして私自身は、男女関係なく職員 1 人 1 人で見ているので、松尾さんが言われた 1 人 1 人の個性をいかに尊重していくか、そして男性であれ女性であれ、勇気を出して声を上げるというふうに言われたけれども、そこはしっかり対応していきたい。私自身今日は勉強するつもりで来たので、本当に参考になった。担当課はいかがか。

(山崎主任)

- ・子どもから学ぶという視点はなかったなので、そういった観点で何かできないかということは、改めて考えてみたいと思った。

(市長)

- ・男女参画・市民協働課と教育委員会で、トークフォークダンスのような今ある取り組みをうまく生かして何か男女参画社会の実現につながるようなことができればいいと思う。

(大庭教育長代理)

- ・世代間ギャップというか、私も無意識の思い込みは持っていると思う。本日のこども教育会議でこのテーマを取り上げて、今後啓発や研修をしていく中で世の中を完全に変えることはなかなか難しいかもしれない。
- ・しかし、子どもたち、若者たちの変化を理解していくというのは、コミュニティーをしっかりと存続していくために必要だし、市長がこのテーマを取り上げて、さらに市議会で女性が活躍されているのを実際に見て、応援する人が 1 人 2 人と増えていけば、男女共同参画に近づくことができるのではないと思う。

(市長)

- ・男女平等というと、男女であつたらなんとなくこんなイメージ。すべてが一緒ではない性差はあると思うけれども、世の中で言われているのは男女の賃金格差というのがあり、これをどうこうしていくかという話が出るのですけれども、逆のパターンで女性が優位なケースがあるのか。

(松尾委員)

- ・医療職の経験があるが、医療の現場では女性が中心にいる。看護師さん、師長さんは女性の方が多く、医療の現場の実働部分では女性の方が強かった感じはある。
- ・職種によるだろうが、もともと保育教育というのは、母性が大事ということで女性の方がよいとされることもあったと思う。ただ、保育士さんは給与面で平均からかなり落ちている、遅れているということを言われることがある。

(市長)

- ・今日、皆さんからいただいた意見の中で来年度実行できるものもあると思う。ぜひ庁内で検討していきたい。
- ・私自身、例えば社長というと男性を思い浮かべる。以前友人が言っていた「国連難民高等弁務官の緒方貞子さんは女性だからと優遇されてのし上がったわけではなく、1 人の人として尊敬されている」という話を受けて、そういう社会、そういう意識が、とても大事だと思ったということを最後に申し上げたい。

3 閉会(進行:松尾企画部長)